



## 考え合うことも育む場

この場では、ただ集うだけでなく、「考え合う時間」も生まれています。ある日、子どもたちが「なんで公園にごみ箱がないの？」と問いかけました。その問いに対して儀間さんはこう話しました。「昔は公園にもごみ箱があったけれど、持ち込みごみや不適切な使い方が増えて、管理が大変になってどこもなくなってしまったんだよ」子どもたちは驚き、活発な意見交換が始まりました。

- 「そんなことがあるなんて信じられない」
- 「ごみ箱あった方がポイ捨て減るんじゃない？」
- 「でも管理が難しいんだね」

ここでは、単に「ごみ箱がある/ない」の話ではなく、公園を自分事として考える機会が生まれています。



## 顔見知り地域が安心につながる

「ぱーらーうがんもー」がつくるのは笑顔や会話だけではありません。それは、顔見知りが増え、あいさつが生まれるような、地域の「日常のつながり」です。

こうしたつながりは、地域防災の観点でも重要です。いざという時に支え合える関係性は、いきいきとした日常の中でしか育ちません。日々顔を合わせ、気軽に話し合える関係があることは、地域の安心感や安全の基盤になります。

「ぱーらーうがんもー」が育んでいるのは、ただの「居場所」ではありません。顔をあわせて話すこと、立ち止まる時間が積み重なること。それが公園本来の魅力を引き出し、暮らしにつながる力になっています。そして儀間さんは、こう語ります。

「宮平が好き、うがんもーが好き、そしてここで会う人とのユンタクが楽しい、それが私が続ける理由。」

時に立ち止まり、顔を合わせて話す、そんな何気ない時間が、公園を「ただの場所」から「暮らしの場」に変えていくのだと思います。

公園は、誰もが自由に使える公共の場所。そこに「暮らしの時間」を重ねることで、人と人のつながりが生まれます。今回の事例が、あなたの近くの公園の使い方を、ほんの少し変えるきっかけになれば嬉しいです。

右のQRから、「都市公園イベント利用手引き」をチェック  
あなたのアイデアが、次の「ユンタクの場」につながるかもしれません。



# 公園の“これから”を考える 午後3時に現れる 「ぱーらーうがんもー」

問 都市整備課 ☎889-1632 / 総務課 ☎889-4415



通学路にある公園の片隅。午後3時になると、傘やテーブルとともに、ゆんたく（おしゃべり）の場がそと立ち上がります。それが週に一度、不定期で公園に現れる「ぱーらーうがんもー」。

「ぱーらー」という言葉は、フランス語の parler（話す）が由来。沖縄では軽食のお店の名前としても使われますが、本来は「談話室」の意味です。この場所は、まさに「公園でつながる談話室」。老若男女がふらっと立ち寄り、自由に過ごし、ゆんたくを楽しむ、そんな新しい公園の利用の形を示す場です。

## ごみとの出会いがつなぐ出発点

活動が始まったのは2025年3月10日。主宰するのは、公園近隣に暮らす儀間さんと、町内の学校でスクールソーシャルワーカーとして活躍する根川さん。

「学校だけでなく、地域の日常にも安心して過ごせる場がほしい」、そんな思いからでした。

そもそものきっかけは、ごみ問題への気づきでした。新しくなったウガンヌ前公園（うがんもー）で、ごみが散乱する光景を目にした儀間さん。それ以上に印象的だったのは、子どもたちがそのごみを気にも留めず歩いている姿でした。

「どうしてごみを気にしないのだろう？」「この公園を、もっと好きになってもらうには？」そんな問いをきっかけに、ごみを拾いながら地域と向き合う時間と、午後3時からの「ゆんたくの時間」が生まれました。



ぎま ちえ  
儀間 千恵さん



ねがわ ひろき  
根川 弘樹さん

## 自由な時間がつなぐ人と人

「ぱーらーうがんもー」では、ルールをあえて設けていません。来たい人が来て、好きなように時間を過ごすだけ。看板も、その日の参加者みんなで描きます。

参加者は、小中学生、保育園帰りの親子連れ、お年寄りなど多様な世代。ぱーらーで子どもたちに出すおやつは、近隣の方や施設からの寄附や儀間さんや根川さんの提供でまかなわれています。子どもたちの声にはこんなものがあります。

- 「ここに来ると安心する」
- 「知らない人とも仲良くなれる」
- 「小学生が中学生と仲良くなれる」

自由だからこそ、思い思いの交流が生まれ、町の中に自然な「人と人のつながり」が育っています。

